

自尊感情尺度短縮版の作成

Developments of short versions of RSES: Rosenberg Self-Esteem Scale

鍋谷照*, 宮嶋郁恵**, 橋本勝*

*静岡英和学院大学 (Shizuoka Eiwa Gakuin University)

**福岡女子短期大学 (Fukuoka Women's Junior College)

緒言

自尊感情とは、自尊、自己受容などを含め、人が自分自身についてどのように感じているのか、その感じ方のことであり、自己の価値と能力に関する感覚及び感情である。

質問紙法による主要な自尊感情尺度としては、ローゼンバーグの尺度、クーパー・スミス¹⁾の尺度、ジャニスとフィールドの尺度がある。最も使われている尺度として、Rosenberg¹⁾の自尊感情尺度 (Rosenberg Self Esteem Scale: RSES) がある。自尊感情には、自分は「とてもよい」と感じるものと、自分は「これでよい」と感じる側面があるという。Rosenbergの尺度による自尊感情は、「これでよい」と感じるものを扱う。他者に優越感をもつのではなく、自分を価値のある人間であると捉えることの程度を扱うものである。

最も用いられていると思われる邦訳は、山本²⁾による尺度と思われる。ところが、山本³⁾は、この尺度作成の手続きにおいて、本来10項目である尺度を1項目削除したうえで、1因子構造と扱い、どの項目が削除されたのかの記載がない。そして、論文中の扱いは10項目の構成のまま得点を算出しているようである。

また、内田と上埜⁴⁾の指摘によれば、多くの自尊感情尺度を用いた研究において、回答選択肢が4件法から7件法までさまざまな形式で用いられていること。質問項目の回答カテゴリーの表現が異なる。または2因子であるなど因子構造に違いがあると述べている。

ところで、多くの研究において心理尺度は、他の質問と組み合わせて使用される。仮に短縮版が作成出来れば、回答者の負担を減らし、回収率が高まることが期待出来る。

そこで、本研究の目的は、Rosenberg⁵⁾により作成され、Mimura & Griffiths⁶⁾によって訳された日本語版自尊感情尺度 (RSES-J) の因子構造を確認し、短縮版を作成することである。

方法

1) 期日

調査期日は2013年4月～5月及び2014年4月～5月である。調査にあたり、研究の目的を説明し、得られたデータは研究目的以外には用いないことを伝えた上で同意をとり、アンケートは授業を担当した教員によって配布および実施された。

2) 対象者

対象者は静岡県、福岡県の大学生及び短大生である。2013年実施対象者が317名（男性44名、女性273名）であり、2014年実施対象者は333名（男性56名、女性277名）の計650名であったが、今回は対象者を女性に限定した。データに記入漏れなど欠損がある場合、当該項目を算出できないため、項目によって対象者数が異なるものがある。550名のうち全回答項目において有効であったデータは533名から回収された。

3) 自尊感情

今回、Rosenbergにより作成され、Mimura & Griffiths⁷⁾によるRSES-Jの質問内容を用い、各項目について4件法で回答を求めるものである。各項目は次の通りである。

- 1) 私は自分自身にだいたい満足している。
- 2) 時々、自分はまったくダメだと思うことがある。*
- 3) 私にはけっこう長所があると感じている。
- 4) 私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる。
- 5) 私には誇れるものが大してないと感じる。*
- 6) 時々、自分は役に立たないと強く感じることもある。*
- 7) 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている。
- 8) 自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う。*
- 9) よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう。*
- 10) 私は、自分のことを前向きに考えている。

*⁷⁾の項目は逆転項目として処理する。

4) 手順および統計処理

短縮版作成の手順としては、因子分析を行い因子構造の確認をする。次に構成された項目における信頼性分析を行い、不要な項目を削除していった。このように項目の削除を繰り返して短縮版を作成した。

因子構造の検討には探索的因子分析を行った。内的整合性の確認のためにクローンバックの α 係数を算出し、本来の10項目版との相関を検討の上、GP分析を施し信頼性を確認した。GP分析では

一元配置の分散分析を行い必要に応じてBonferroniのpost-hoc testを行った。すべての統計処理はSPSS16.0Jを使用した。

結果

1) 因子構造について

調査対象者から得られた10項目の回答について、主因子法による因子分析を行った。固有値 ≥ 1.0 を基準として分析したところ、2因子の構造が得られた。しかしながら、第1因子の固有値は3.645であり、分散の36.454%であった。第2因子の固有値は1.086であり、分散の10.863%であった。因子間の相関は0.709であった。第1因子と第2因子の固有値には大きな開きが見られた。表1には各項目における共通性、表2には回転後の因子パターンを示した。

表1. 10項目における共通性

| 項目 | 内容 | 共通性 |
|----|---------------------------------|-------|
| 1 | 私は自分自身にだいたい満足している | 0.166 |
| 2 | 時々、自分はまったくダメだと思うことがある | 0.233 |
| 3 | 私にはけっこう長所があると感じている | 0.331 |
| 4 | 私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる | 0.258 |
| 5 | 私には誇れるものが大してないと感じる | 0.322 |
| 6 | 時々、自分は役に立たないと強く感じることもある | 0.380 |
| 7 | 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている | 0.391 |
| 8 | 自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う | 0.065 |
| 9 | よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう | 0.381 |
| 10 | 私は、自分のことを前向きに考えている | 0.291 |

表2. プロマックス回転後のパターン行列

| 項目 | 内容 | 因子 | |
|----|---------------------------------|--------|--------|
| | | 1 | 2 |
| 7 | 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている | 0.946 | -0.226 |
| 4 | 私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる | 0.611 | -0.081 |
| 3 | 私にはけっこう長所があると感じている | 0.479 | 0.164 |
| 1 | 私は自分自身にだいたい満足している | 0.306 | 0.104 |
| 9 | よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう | 0.093 | 0.65 |
| 2 | 時々、自分はまったくダメだと思うことがある | 0.028 | 0.511 |
| 6 | 時々、自分は役に立たないと強く感じることもある | 0.272 | 0.445 |
| 5 | 私には誇れるものが大してないと感じる | 0.195 | 0.438 |
| 8 | 自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う | -0.159 | 0.339 |
| 10 | 私は、自分のことを前向きに考えている | 0.297 | 0.328 |

2) 信頼性について

RSES-Jの10項目について、内的整合性の信頼性係数であるCronbackの α 係数を算出したところ、 $\alpha=0.794$ という結果であった。

3) 項目の削除について

共通性が低く、第1因子及び第2因子にまたがって潜在変数との関わりを示すものを削除項目の候補として考えた。また、その項目を削除することによる α 係数の変化、他の項目との相関係数も参考にした。これらの情報から、項目8「自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う」を削除することを試みた。

9項目の解答について、再度、主因子法による因子分析を試みた。固有値 ≥ 1.0 を基準として分析したところ、1因子構造となった。第1因子の固有値は3.618であり、分散の40.198%であった。第2因子の固有値は0.978であり、分散の10.870%であった。表3は9項目による因子分析から導き出された共通性と負荷量を示したものである。

表3. 9項目における共通性と負荷量

| 項目 | 内容 | 共通性 | 負荷量 |
|----|---------------------------------|-------|-------|
| 1 | 私は自分自身にだいたい満足している | 0.157 | 0.382 |
| 2 | 時々、自分はまったくダメだと思ふことがある | 0.220 | 0.478 |
| 3 | 私にはけっこう長所があると感じている | 0.331 | 0.608 |
| 4 | 私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる | 0.256 | 0.497 |
| 5 | 私には誇れるものが大してないと感じる | 0.322 | 0.586 |
| 6 | 時々、自分は役に立たないと強く感じることがある | 0.379 | 0.663 |
| 7 | 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている | 0.383 | 0.653 |
| 9 | よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう | 0.376 | 0.658 |
| 10 | 私は、自分のことを前向きに考えている | 0.291 | 0.585 |

同様の手順に従い項目の削除を進めた。その結果、項目1「私は自分自身にだいたい満足している」、項目2「時々、自分はまったくダメだと思ふことがある」、項目4「私は、他の大半の人と同じくらいに物事がこなせる」を、先の削除項目8に追加して削除した。

この6項目1因子の構成においても、因子固有値2.958を示し、分散の49.302%であった。そして α 係数は0.792であった。6項目による因子分析から導き出された共通性と負荷量は表4に示す通りである。

表4. 6項目における共通性と負荷量

| 項目 | 内容 | 共通性 | 負荷量 |
|----|---------------------------------|-------|-------|
| 3 | 私にはけっこう長所があると感じている | 0.296 | 0.605 |
| 5 | 私には誇れるものが大してないと感じる | 0.315 | 0.625 |
| 6 | 時々、自分は役に立たないと強く感じることがある | 0.366 | 0.675 |
| 7 | 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている | 0.300 | 0.609 |
| 9 | よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう | 0.327 | 0.643 |
| 10 | 私は、自分のことを前向きに考えている | 0.278 | 0.597 |

また、10項目との尺度得点と6項目の尺度得点の相関係数は $r=0.941$ ($p<0.001$) であり、 $y = 1.307x + 4.205$ の回帰式が導かれた。

4) GP分析について

短縮版として考えられる6項目の尺度得点の合計によって、対象者を4分位によって分割し、各群における項目の点数の比較を試みた。その結果、項目3「私にはけっこう長所があると感じている」において、2群(25-50%ile)と3群(50-75%ile)のpost-hoc testの結果に有意差が見いだせなかった以外は、すべての群間に有意差が見られた。表5は分散分析の結果である。

表5. 6項目のGP分析結果

| 項目 | 内容 | F値 | p | post-hoc | | | | | |
|----|---------------------------------|---------|-----|----------|------|------|-------|------|------|
| | | | | 1vs2 | 1vs3 | 1vs4 | 2vs3 | 2vs4 | 3vs4 |
| 3 | 私にはけっこう長所があると感じている | 99.951 | *** | *** | *** | *** | 0.102 | *** | *** |
| 5 | 私には誇れるものが大してないと感じる | 119.945 | *** | *** | *** | *** | ** | *** | *** |
| 6 | 時々、自分は役に立たないと強く感じることもある | 142.494 | *** | *** | *** | *** | ** | *** | *** |
| 7 | 自分は少なくとも他の人と同じくらい価値のある人間だと感じている | 121.068 | *** | *** | *** | *** | ** | *** | ** |
| 9 | よく、私は落ちこぼれだと思ってしまう | 152.164 | *** | *** | *** | *** | *** | *** | *** |
| 10 | 私は、自分のことを前向きに考えている | 139.504 | *** | *** | *** | *** | *** | *** | *** |

考察

本研究においては、山本ら⁸⁾や内田と上埜⁹⁾の導き出した因子構造とは異なる結果であった。本研究では10項目を因子分析に投入すると2因子の構造として導かれた。プロマックス回転後のパターン行列を解釈すれば、「肯定的評価」の因子と「否定的評価」の因子であると思われる。しかしながら、山本ら¹⁰⁾が論文脚注に示すように、主成分分析を行い、共通性の値を1に固定したうえで分析すると、第1成分に9の項目が集まり、第2成分は1つの項目のみとなる。その項目が項目8である。その項目を削除すると、1因子の構造となる。

項目8「自分のことをもう少し尊敬できたらいいと思う」は、本研究における共通性の値が、他の項目と比較すると1桁低い値である。つまり、独自性がきわめて高いことになる。この項目については、肯定的に前向きな気持ちになろうという状況と、否定的になりどうしても肯定的にはとらえられないという気持ちが混在しているのかもしれない。

また、山本ら¹¹⁾や内田と上埜¹²⁾との相違は、調査対象者に起因する可能性があると思われる。2つの先行研究は男女ともに調査対象者として扱っているが、本研究の分析対象者は女性だけである。梶田¹³⁾によれば、男性の自己意識が「自己へのまなざし」が大きな広がりがあるのに対し、女性の自己意識では「他者からのまなざし」がとれない自己意識の中核をなしているという。男性は自己の在り方を考えるのに対し、女性は他者との相対的な位置関係において自分の評価がなされると考えられる。このような相違はポジティブな評価とネガティブな評価の関わりが単に対立概念としての一軸の評価になりにくい可能性を秘めている。しかし、その他の項目については、逆転項目がそのまま対立概念として成り立っているものと思われる。

短縮版を作成する過程において、調査における負担感を軽減することを重視して、更に項目を少なくすることも可能であると思われる。しかしながら、手持ちのデータからは、外的基準との関わりを確認する基準関連妥当性等を確認する術がない。そのため、現段階では、他の研究によって基準関連妥当性が確認されている10項目版の尺度得点と相関の高い6項目の短縮版までに止め、肯定

的評価になっている項目と逆転項目になっている否定的評価の項目を3項目ずつ残すこととした。
更なる項目の削減と妥当性の検証については、今後の課題としたい。

付記

本研究は、2014年度静岡英和学院大学及び静岡英和学院大学短期大学部における共同研究助成活動の一部を報告するものである。

-
- 1 Rosenberg, M.: Society and adolescent self-image, New Jersey, Princeton University Press, 1965
 - 2 山本真理子(編), 心理測定尺度集 I - 人間の内面を探る (自己個人内過程), サイエンス社, 2001
 - 3 山本真理子, 松井豊, 山成由紀子: 認知された自己の諸側面, 教育心理学研究, 30, 64-68, 1982
 - 4 内田知宏, 上埜高志: Rosenberg自尊感情尺度の信頼性および妥当性の検討 - Miura & Griffiths訳の日本語版を用いて -, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 58, 257-265, 2010
 - 5 前掲書1
 - 6 Mimura, C., Griffiths, P. : A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence, Journal of Psychosomatic Research, 62, 589-594, 2007
 - 7 前掲書6
 - 8 前掲書3
 - 9 前掲書4
 - 10 前掲書3
 - 11 前掲書3
 - 12 前掲書4
 - 13 梶田叡一: 自己意識の心理学, 東京大学出版会, 1980